

4月



撮影：2017年3月（岩手県一関市・磐井川）



あの日のあの川 リレー日記 ～第27話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第27話主人公 讚井 知（さない さと）

（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 社会工学専攻 都市環境行動学研究室）

（■川ガール・□川系男子）

（出身地を流れる川：茨城県小貝川）

「白鳥と待つ川」

いつのこと？： 幼少～現在

どこの川？： 磐井川（岩手県）

先月号を執筆された坂本さんからのバトンを受け、「正真正銘の川系男子の後では川ガールを名乗ることなんてできない…」と身動きが取れなくなっていたが、勇気を振り絞って家の外に出てみると家の周りには小貝川や鬼怒川や利根川が流れ意外と身近にたくさんの川があることに気が付いた。そして記憶の旅に出るとさらに多くの川が私の周りにはいつも静かに流れていた。

今回は私の心の故郷であり母方の実家がある岩手県一関市を流れる磐井川について紹介したい。磐井川は栗駒山を源に発している。栗駒山にある須川高原は、冬場は雪が深いですが、少し暖かくなると春先にはミズバショウ、初夏にはニッコウキスゲやサクラソウなどの清楚で可憐な山野草を楽しめる。秋には紅葉が絶景で、初夏から秋の間には須川温泉という温泉が開かれることから地元住民だけでなく隠れファンも多い地域だ。



巖美溪

中流には巖美溪と言う国の名勝があり、栗駒山の噴火によって堆積した凝灰岩が磐井川の水流によって浸食されてできた迫力ある景色を楽しめる。ここを流れる磐井川は、青く美しくそしてとても力強い。この溪流の対岸にロープを張り、ロープウェイのようにして団子を運び販売する郭公団子は今では「空飛ぶ団子」としてメディアで注目され全国でも有名になった。

そこから少し下ると一関駅前の地域に流れ出る。町を流れる磐井川は中流までと変わり、地域の生活に寄り添って静かに流れる川になる。人に寄り添う川はその水面に様々な景色を映した。

暖かい時期、磐井川では様々なイベントが行われる。東北の夏は短い。その短い夏を精一杯謳歌するように

人々は川に集い楽しむのだ。花火大会の日には、幼い女の子たちの愛らしい浴衣の柄や男の子たちの光るおもちゃ、屋台の食べ物、そして大きな花火が暗くなった川面に反射する。そして行きかう人の笑顔を幸せそうに華やかに揺らすのだった。またある時は、亡くなった方を偲び灯籠流しが行われる。そんな時は独特な物悲しさと懐かしさが入り混じったような優しいオレンジ色の灯りをのせて川はゆったりと静かに流れるのだった。

冬になり寒くなると、川は河原で遊ぶ子供や家族連れの幸せな日常を映した。私は幼いころ身体が弱かったため、祖父母宅に長期滞在し空気の綺麗なこの地で毎日を過ごすことが多かった。そんな私の楽しみというと、磐井川に渡ってくる白鳥におやつをあげることだった。冬場は防寒のためにスキー用のジャンパーを着せられ、帽子や靴下を二重に身に着けるために外出は窮屈で億劫だったが、白鳥におやつをあげる時だけは別だった。

白鳥は美しい見た目は反してきゃーきゃーと、はしゃいでいる様な声で鳴く。土手に止めた車のドアを開け、その声が聞こえると私の胸は飛び上がるように高鳴るのだ。土手から転がるように河原に走り降りると、両手にかっぱえびせんが何袋も入ったビニール袋を持つ祖父母を携え、私はただひたすらかっぱえびせんを白鳥たちに向かって投げる。周りにも同じような家族連れがいたが、我が家のかっぱえびせんの量はどこよりも多かったと思う。手のひらいっぱいにつかんで、白く大きい白鳥に向かって何十分も何度も何度も投げる。気合が入りすぎて、終り頃は細かく潰れたえびせんが手のひらにベトベトくっついていて、



橋に飾られた白鳥のオブジェ

空になったかっぱえびせんの袋を恨めしそうに握りしめる私に対し、「白鳥さんは今年もさとちゃんが来るのを待っていたんだね。明日も来ようね」と、祖父母宅に戻る車の中で家族は優しく声をかけてくれた。

滞在中、特に予定のない日は毎日飽きずにおやつをあげに来た。だが、白鳥は渡り鳥なので、2月3月になると徐々にいなくなってしまう。大群でいつものようにきゃーきゃーと楽しそうな声をあげながら大空を飛ぶ姿は、青い空に白く大きい身体が映えて冷たい東北の空気とともに胸をすっとさせる。その頃は私も4月の新学期に向けて自分も茨城に帰らなければならない。茨城の日々が嫌なわけではないが、豊かな自然や優しい祖父母のもとを離れて、日々の喧騒の中に戻っていく自分と重ねて「頑張れよ～」と大空を見上げると、空を舞う白鳥の姿は滲んでしまうのだった。

中には、なかなか飛び立たない白鳥もいた。それはそれで胸が締め付けられた。羽を怪我しているのか、仲間はずれにされて悲しんでいるのか、飛ぶことをあきらめているのか、ここが好きなのか、想像してもわからないが、幼い私は「このままじゃ死んじゃうかもしれない」と必死だった。大声をあげながらできるだけ近寄って追い立てた。それでも飛び立たない白鳥を後に残し帰らなければならないときは「どうか気温が高くなってでも死んでしまいませんかように」と帰りの車の中でひたすら手を合わせるのだった。

大きくなるにつれて私の身体は頑丈になった。それと同時に祖父母宅に行く回数も滞在日数も減った。特に町を流れる磐井川を訪れる回数は必然と少なくなり意識することはなくなっていった。



磐井川河川公園

10年以上ぶりだろうか。今回3月末に訪れた久しぶりの磐井川は記憶と変わらず大きく静かに流れていたが、人の姿はなかった。川は曇った空だけをうつしていた。昔白鳥におやつをあげていた河原におりると、遊具は壊れており、草が背が高く生えていた。そして、ネットが張ってあり川面に近づくことができなかった。たださえ人口の流出が進む地方都市では川で遊ぶ子供の姿を見ることはもうできないのかもしれない。白鳥に関しては以前のように飛んできているのかどうかもわからない。いずれにしても3月末では会える可能性はないだろう。

変わらない川の流れと、変わる社会や環境の変化を感じ、少し切ない思いで土手や河原を歩いた。想いを巡らせて考えてみれば心の故郷のこの地ではこの10年で様々なことが起こっていた。一関駅前には昔は一関銀座と呼ばれ観光拠点地として賑わいを見せており、私が小学生の頃までは華やかな時代の名残があったが、いつ

の間にか高齢化の波を受け昔ながらの商店街はシャッターが下りている店が増えた。東日本大震災では津波被害はなかったもののたくさんの建物が壊れた。でも、暗いことばかりではない。ここ数年ではリノベーションカフェやクリエイターさんが手掛ける手作りのお洒落なお店が増えていた。母世代の人たちが定年退職を迎え都会から帰ってきているという話もよく聞く。子供は少なくとも、社会に適応しながら動的に生き生きと生きている印象を持った。

故郷に生きる人達も変わっていた。私にとって大きなことは、私を大切に育ててくれた大好きな祖母が認知症を発症し介護が必要になったことだ。ニコニコ笑顔で家族の中心にいた祖母は無表情になった。私の母は毎月介護に茨城から通うようになり、私は母の、娘としての姿を初めて見るようになった。いつも外交的で華やかだった祖父は祖母を心配して家から離れなくなっていた。家はヘルパーさんが頻繁に出入りしていて、介護も思うように手伝いできない私はオロオロしてしまう。岩手には親戚も多い。私を姉のように慕ってほしい。いつまでも小さいと思っていた女の子もこの春いよいよ大学生になる。同世代の従兄弟達はそろそろ結婚に向けた動きをしているらしい。…

日々は緩やかに変化するはずなのに、記憶と現実では時の流れ方に差があるようだ。自分の故郷とと思っている場所の今を私はもしかしたらあまり知らないのかもしれない。川沿いを歩きながらそんなことを考え少し取り残されたような気持ちになった。

その時、近くでバタバタと音が聞こえた。目をやると羽ばたく一羽の白鳥が目に入った。まだ旅立たない白鳥が残っていたのだ。私が子供のころ「生きていて欲しい」と願った子ではないのかもしれないが、私の胸には懐かしさと喜びが溢れた。私の居場所がこの地に今もあるとその白鳥は言ってくれているように感じた。



まち中を流れる磐井川

私の幼い頃の記憶は美しい自然に包まれていることが多い。けれど、日常に追われるうちにその感動を振り返る時間がなくなり、生き生きと息づいていた自然はいつしか思い出の中の2次元の背景となってしまふ。美しい絵画の中やふとした言葉によって、それらの景色が記憶の底から呼び起こされることはあるが、こうなるとそれは他人が作った芸術のように少し距離があるが故の感動だった。時々思い出されるからこそ懐かしく胸が熱くなる、そんな類の思い出の風景が記憶の中にはたくさんある。そしてそうした思い出の景色を後に訪れると、

記憶とは違うという印象を受けることが多かった。期待外れだったと感ずることも記憶より美しく感ずることもあるが、それ以上に純粋に、ああ人間が変化するように景色も変化するのだということに気が付かせられる。

川はよく人生に例えられる。上流から下流までその様相は変化し、動植物を育み、癒しを与え、周囲の環境と影響し合いながら海に流れ出る。その無常さや寛容さや雄大さに人は感動し美しさを感じる。だが、私が今回磐井川を通して感動した川の顔は、時代を映しながら誰もが帰ってこられる場所としてあり続けてくれることだ。子孫を残すために帰ってきた魚を、羽を休めにきた渡り鳥を、心の故郷としていつまでも大切に想い続ける人を、包み込み、変化する街を見守りながら、川はそこに変わらずあり続けてくれる。水面にはその時代を映し、記憶に残してくれる。川はそれ自体がダイナミックに常に変化しながら、周りの変化するものを受け止めているようだった。

この春、私は博士課程に進学するためまだ学生が続くが、同い年の友人たちは学部卒の人だけでなく修士課程に進学した人も社会人になる人が多い。私に「これからの研究生活へのエール」としてバトンを渡してください。坂本さんもこの春つづばを旅立たれ新しいフィールドで活躍される。そんな皆さんに、私の心を育み思い出を作り帰って来るのを待ってくれる心の故郷の川の存在を紹介してはなむけの言葉としたい。

※本稿で紹介したすべての写真は2017年3月に撮影したものです。

(次は前田紗希さんにバトンを託します)